



村史編さんだより

第109号 2020年5月1日 大宜味村村史編纂係44-8009 Eメール:sonshi@vill.okimi.okinawa.jp

上原に鎮魂の桜69本

～元護郷隊員の端慶山さん 命の恩人の遺族と面会～

第二次大戦末期、14歳から17歳の少年を召集し護郷隊が組織された。陸軍中野学校出身の将校らが率いる護郷隊は秘密戦を旨とし、多野岳、恩納岳などを陣地として、各地でゲリラの戦闘を展開したものの、米軍の圧倒的な戦力の前に多くの若い命が犠牲になりました。

当時17歳の瑞慶山良光さんも、わずか二週間の訓練を経て前線に立たされた。大宜味村出身者で構成する第二中隊の中隊長は、青年学校の教官でもあった吉浜正定さんで、彼の的確な判断によって多くの命が救われたという。命の恩人である吉浜さんに感謝の



右…父の思い出を語る武重さん
左…戦中戦後の出来事を語る良光さん

気持ちを伝えたいと切望していたが恩師はすでに鬼籍の人、せめて遺族に会いたいという悲願が、4月1日（水）、上原公民館に吉浜さんの二男武重さんが駆けつけ実現しました。

当時の様子を語る瑞慶山さんの記憶は鮮明で、万座毛に駐屯していた米軍の戦車部隊攻撃の際、教え子を犬死させることはできないと吉浜さんが撤退を命じ、第二中隊（大宜味）と第三中隊（東）の60名もの命が救われたこと、手榴弾の破片で負傷した瑞慶山さんに肩を貸し、陣地に連れ帰り軍医の治療を受けさせてくれたこと、吉浜さんが先頭になって米軍の包囲網をかいくぐり命からがら逃げてきた体験など、「吉浜さんがいなかったら今僕は生きていない」と何度も繰り返していました。

武重さんは、「親父は子供に戦争の話はしなかった。安富祖の護郷隊碑を訪ねる時も、子供達は車に残し一人で手を合わせていた」といい、大人になって資格をとるため自衛隊に入りたいと言った時に、「行くなら親子の縁を切ってから行け」と言われ断念したことや、仕事で顔を合わせた山原の大工さんに「正定さんに命を助けられた」と何度か言われた経験など、「全てが今日の話で繋がった」と感慨深げにうなずいていました。

戦争が終わっても瑞慶山さんの苦しみは続き、17歳の少年には抱えきれない地獄の体験は彼の精神を破綻させた。夜中に奇声を発して山や海に飛び込んだり、自損行為を繰り返す彼を人々は“戦争幽霊”と呼んだ。訪ねてきた兄の戦友が座敷牢のような所に閉じ込められていた端慶山さんを見て、宜野座の軍病院で治療を受けさせたお陰で、運よく回復することができたのだそうです。

瑞慶山さんは、戦争の真実、護郷隊の軌跡、沖縄の精神障がいを取り巻く状況などを、後世に伝えていく使命のために生かされている。護郷隊で亡くなった69名の戦友の慰霊のために植えた69本の桜の世話をしながら、命がある限り語り続けていくと決意を新たにしています。瑞慶山さんの証言は、沖縄スパイ戦史（三上智恵・大矢英代監督2018年）に収録されており、上原では過去2回の上映会が行われました。また、この度、同名の書籍も発刊され、大宜味村図書室にも置く予定ですのでご利用ください。

